



front page essay



ノ三重奏などがそれだ。「勝利型」のヴァリエーションもある。ブラームスの交響曲第四番の、苦々しく「違う、だめだ……」と拒絶する身振りなどがそれである。この「自己否定型」ともいえるべきフィナーレをさらに極端にしたものとして、ハンマーの絶望的な打撃音で終わるマーラーの交響曲第六番なども挙げられよう。またシューベルトの交響曲第七番『グレート』も、随分奇妙な終わり方である。「終われなくなってしまう終わり」とでもいえるべきか。異様な熱狂の中で音楽は旋回し始め、停止できなくなると、まるでゼンマイが切れたように、ぱつたりと絶命するのである。これを「イカルス型」と形容できるかもしれない。ラヴェルの『ラ・ヴァルス』なども、こうした「墜落型」の例だ。

勝利にせよ、帰依にせよ、自己否定にせよ、墜落にせよ、近代クラシックにおける曲の終わり方は、常に形而上的な意味がある。ただし上に挙げた例はすべて、ベートーヴェン以後の、十九世紀以後の音楽だ。しかるに十八世紀以前の音楽のことを考えてみる。ハイドンやモーツァルト、あるいはバッハは、どのように音楽を終えているか。ハイドンやモーツァルトの交響曲の終止は力強く華やかだが、そこにベートーヴェン以後のようなメッセーシ性はあまりない。いわば「シャンシャン」である。どの交響曲でも序曲でもセレナーデでも、たいがい似たような類型的な終わり方なのだ。どこかで終わらねばならないから、しかるべき時刻が来たらとありえず型に従って終わるのである。対するにバッハの音楽でも、こうした「定型的な終止」は多いが、もう少し違ったパターンもある。例えば「平均律クラヴィーア曲集第一巻」の八長調の前奏

曲やフーガなど。これらは、これからもずっと続いていく静かな時間の流れに、とりあえず一時的に終止符を打つといった風情だ。

近代人は時間を完成することに取り憑かれてきたような気がする。「勝利を目指せ！」的な(ベートーヴェンの)発想については言うまでもあるまい。逆に、近代に固有の死への過剰な恐れは、「いずれ時間は完成される(されねばならない)」という強迫観念の裏返しだろう。音楽においてはこのパラドクスを端的に見取ることができる。音楽は完成されると同時に消滅する。音楽の完成は、人生と同じように、その死でもあるのだ。しかるにバッハやモーツァルトの音楽の終わり方には、近代が忘れてしまった時間表象が刻印されている。色々な矛盾は残っていてもとりあえず終わっておく、終わりにそれ以上の意味はない、それでも一応終わらねばならない——モーツァルトの音楽にはそんなウィットがある。バッハの音楽の多くは、静かに消えていくという点で、シューベルトの『未完成』からマーラーの『大地の歌』に至る、帰依型の終止と似ていなくもない。しかしそこには、近代音楽が知らない、さりげなさがある。淡々と、ふつと、消える。でも何かは変わらぬまま続いていく。最近どういうわけか、こういう人間の小ささ、思いを馳せさせてくれる音楽に、とても惹かれる。

近ごろ、本好きの仲間が顔を合わせるとその話になったのが、評伝『アインシュタイン』の翻訳騒動。これが傑作な話なのだ。この次第を「朝日新聞」が読書欄のコラム「本の舞台裏」で伝えている▼武田ランダムハウスジャパンから出た『アインシュタイン』の下巻に意味不明の訳文があった。たとえば「利益がケーキを味わっている言語の破れかぶれの災難」なんて書いてある。現代詩か、シュールリアリストの文章みたい。ほか、珍訳が続出▼どうやら、依頼していた翻訳がまにあわず、外部に発注したところ、機械翻訳にかけて「機械的に訳したらしい」「エキサイト翻訳」ほか、無料で翻訳してくれるサイトがあるのです。下巻はすぐ回収されたが、かえって話題となり、珍訳版は一時ネットオークションで三万円の値がついた。思わぬことで、大きな宣伝となった▼いろんな人に責任はあるが、問題はやはり編集者。事情はあるにせよ、志が低すぎる。装幀家で画家の司修の最新刊『本の魔法』(白水社)を読んでいると、文学が元氣だった一九七〇年代、作家と編集者、そして装幀家の三位一体の格闘のなかで、本が作られていたことがわかる▼森敦『月山』で司修と組んだ河出書房新社の編集者・飯田貴司。司が提示した案が気に入らず、ただ酒を飲むばかり。困った司がやけになつて出した腹案に「これです」と絶叫した。時代が違いますよ、と言うかもしれない。しかし、「絶叫」する思いを失った本など、それこそ紙のムダじゃないか。(野)

シューマンに「歌の終わりに」というピアノ曲がある。『幻想小曲集』作品二の終曲である。ここでは民謡風の旋律が賑やかに繰り広げられながら、いつしか音数が少なくなっていく、やがて馥郁たるロマン派情緒の余韻を漂わせつつ、すべては沈黙の中へ消えていく。これに限らずシューマンの作品には「消えていく終わり」がとても多いのだが、作曲家の最も本質的な特徴は「曲の終わり方」にこそ現われるのではないかと、最近よく考える。そもそも作曲家は、「これでいい／もう充分だ」と思った時点で筆を置く。しからば終わりにこそ、その世界／人生／作品観が最も端的な形であらわされるのは、当然のことであろう。

いくつか典型的な例を考えてみる。『運命』や『第九』におけるベートーヴェンの終止は、輝かしいフィナーレの全面肯定である。目標達成!——何度も力強く打ち鳴らされる終止和音は、近代的な右肩上がりの時間表象のシンボルだ。では先に

挙げたシューマンのような「消える終わり」の先駆例は何かと考えると、ここでもベートーヴェンに行き当たる。彼の最後のピアノ・ソナタ第三番の終楽章では、延々と続くトリルが次第に小さくなっていき、最後にもう一度テーマがこだましてからすべての音が消える。これは「沈黙に帰依する終わり」である。そしてロマン派の作曲家たちは大なり小なり、ベートーヴェンが示した「曲の終わりの二つのモデル」のどちらかに、終止の範を求めた。ブラームスの交響曲第一番やチャイコフスキーの第四番や第五番は「勝利型」。同じチャイコフスキーでも交響曲第六番『悲愴』は「帰依型」。シューベルトの『未完成』も同様。ベートーヴェンの熱心に距離をとっていたように見えるフランス印象派も、少なからぬ「勝利型」フィナーレを書いている。特にラヴェルは、ドイツ系の作曲家にも力負けしない、「圧倒する終わり」を多く残している。『ダフニスとクロエ』やピアノ

曲やフーガなど。これらは、これからもずっと続いていく静かな時間の流れに、とりあえず一時的に終止符を打つといった風情だ。

近代人は時間を完成することに取り憑かれてきたような気がする。「勝利を目指せ！」的な(ベートーヴェンの)発想については言うまでもあるまい。逆に、近代に固有の死への過剰な恐れは、「いずれ時間は完成される(されねばならない)」という強迫観念の裏返しだろう。音楽においてはこのパラドクスを端的に見取ることができる。音楽は完成されると同時に消滅する。音楽の完成は、人生と同じように、その死でもあるのだ。しかるにバッハやモーツァルトの音楽の終わり方には、近代が忘れてしまった時間表象が刻印されている。色々な矛盾は残っていてもとりあえず終わっておく、終わりにそれ以上の意味はない、それでも一応終わらねばならない——モーツァルトの音楽にはそんなウィットがある。バッハの音楽の多くは、静かに消えていくという点で、シューベルトの『未完成』からマーラーの『大地の歌』に至る、帰依型の終止と似ていなくもない。しかしそこには、近代音楽が知らない、さりげなさがある。淡々と、ふつと、消える。でも何かは変わらぬまま続いていく。最近どういうわけか、こういう人間の小ささ、思いを馳せさせてくれる音楽に、とても惹かれる。

◇おかだ・あけおー一九六〇年、京都市生まれ。京都大学人文科学研究所准教授。文学博士。著書に『オペラの運命』(中公新書・サントリー学芸賞)、『音楽の聴き方』(中公新書・吉田秀和賞)、『ピアノストになりたい!』(春秋社・芸術選奨文部科学大臣新人賞)など。

# アフガン 諜報戦争

ステイブ・コール [著]



本書は、一九七九年十二月のソ連軍侵攻から9・11同時多発テロ事件前日に至るまで、アメリカ、パキスタン、サウジアラビアの各情報機関の攻防と、アフガン国内のイスラム戦士やタリバン、アルカイダの動きを中心に、二〇年余りに及ぶ戦争の舞台裏を克明に描いたノンフィクションである。

CIAの見えざる闘い  
ソ連侵攻から9・11前夜まで (上・下)

(上) ISBN978-4-560-08159-4 (下) ISBN978-4-560-08160-0

## 「9.11」はなぜ防げなかったのか?

とくにCIA、NSC (国家安全保障会議) の公開文書と、メディアの報道を渉猟し、本書を書き上げた。クリントン政権とCIA内部での議論ならびに情報経路を明らかにし、「9・11」に至る政策立案と具体的な行動を跡づけたもので、いわば「CIA失策の足跡」を追った第一級のドキュメントといえる。

# 14歳のアウシュヴィッツ

アナ・ノヴァク [著]



一九四四年六月、十四歳の少女アナはアウシュヴィッツ強制収容所に連行される。幼い頃から作家になリたかった彼女は、日々収容所で目にする出来事を、監視員たちの目を盗み、ノートや紙の切れ端にひたすら書きとめていく。個性的な他の囚人たちのこと、粗末なスूपのこと、石切場での労働のことなどを。過酷な状況で正気を保ち、自分自身でありつづけるために……。懸命の努力や偶然の力によって、アナは死の選別を逃れ生還を果たす。本書は、奇跡的に持ち返られた貴重なノートを元

## 『アンネの日記』と対をなす歴史的証言

に、後年、著者が発表した手記である。収容所に連行されるまでが綴られた『アンネの日記』に対し、こちらは連行されてから、アウシュヴィッツを始め次々と送られた収容所での生活が、生々しく記録されている。

# 北緯10度線

キリスト教とイスラームの「断層」



アメリカのジャーナリストで詩人でもある著者は、二〇〇三年から七年間かけて、北緯10度線沿いに並ぶアフリカとアジアの六カ国(ナイジェリア、スーダン、ソマリア、インドネシア、マレーシア、フィリピン)を巡り、この地域一帯がキリスト教とイスラームという二つの大きなプレートがぶつかり合っていること「信仰の断層線」を成していることに気づいた。本書は、この断層線の地理的、歴史的、文化的、宗教的、人口動態的な変遷によって、それぞれの地域での実態がどのように異なる

## 「起業」という幻想

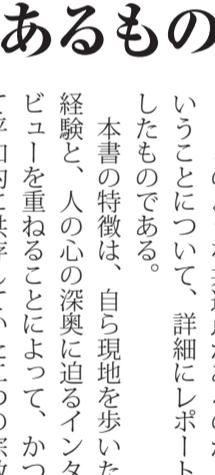
スコット・A・シエーン [著]



マイクrosoftのビル・ゲイツ、アップルを立ち上げたスティーブ・ジョブズ、オラクル創業者のラリー・エリソン。こうした人物に象徴されるように、身ひとつでたまたま上げた「起業」に成功して巨万の富を築くというアメリカン・ドリームは今なお、「神話」として米社会を根本で支えている。

## 「宗教対立」の根底にあるもの

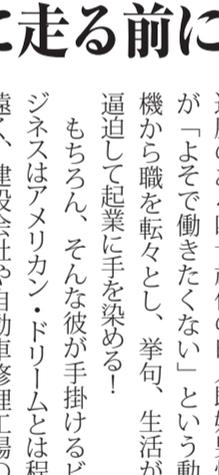
アメリカン・ドリームの現実



り、どのような共通点があるのかという点について、詳細にレポートしたものである。

## 会社を辞めて「起業」に走る前に

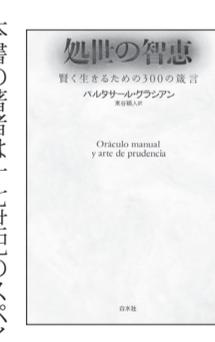
アメリカン・ドリームの現実



退歴のある四十歳代の白人既婚男性が「よそで働きたくない」という動機から職を転々とし、挙句、生活が逼迫して起業に手を染める!

# 処世の智慧

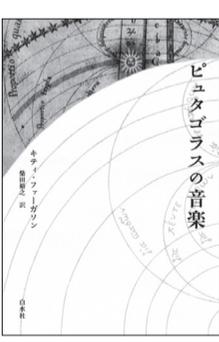
賢く生きるための300の箴言



本書の著者は十七世紀のスペイン・バロック文学を代表する作家・思想家。かつては「太陽の沈むことなき帝国」として栄華を誇ったスペインが衰亡していった時代である。グラシアンは十八歳でイエズス会に入会、カトリック司祭として宗教活動に専念する傍ら、会則を無視して偽名で著作を発表したり、イエズス会の仲間をかばい任地転換されたり、イエズス会では問題児だったが、同時代の社会や人間への深い洞察力と鋭い批判精神には定評があり、モラリスとして多くの著作を残した。

# ピユタゴラスの音楽

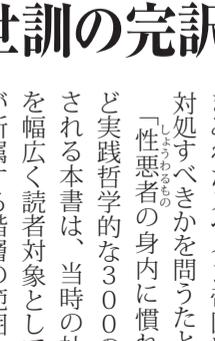
キティ・フアーガソン [著]



「ピユタゴラスの定理」で知られる紀元前六世紀のギリシア賢人、ピユタゴラスの生涯は数奇に満ちている。本書はピユタゴラスの生涯と思想を詳しく紹介し、以後現在に至るまでの二十五世紀に及ぶ思想の継承史を辿る壮大な試みである。

## ニーチェが傾倒した処世訓の完訳

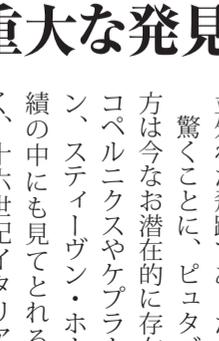
賢く生きるための300の箴言



まみれたスペイン帝国に個人がどう対処すべきかを問うたところにある。「性悪者の身内に慣れること」など実践哲学的な300の箴言で構成される本書は、当時の社会の各階層を幅広く読者対象として捉え、各人が所属する階層の範囲内でいかに慎重に抜け目なく行動することで人生の勝利者となるか、その方法を具体的に説いている。世間知らずの賢人などまつたくの論外、という姿勢に貫かれ、現実的である。

## 人類思想史上、屈指の重大な発見

人類思想史上、屈指の重大な発見



並外れた飛躍であった。驚くことに、ピユタゴラスの考え方は今なお潜在的に存在している。コペルニクスやケプラー、ニュートン、ステイヴン・ホーキングの業績の中にも見てとれるばかりでなく、十六世紀イタリアの建築家パラーディオの建築や、十九世紀アメリカの作家オルコットの小説など意外なところにも表れている。二十世紀にはバートランド・ラッセルやアーサー・ケストラーなど錚々たる思想家がピユタゴラスのことを「知的基盤を築いた巨人」と見なしている。またこれ以外にも、キリスト教、フランスやロシアの革命思想との関わりなど、興味深い指摘に事欠かない。知的好奇心を刺激する、発見と探究の魅力あふれる書。

# ハドリアヌス ローマの栄光と衰退

アントニー・エヴァリット「著」



古代ローマ史のなかで最も謎めいた人物、皇帝ハドリアヌス。いわゆる「ローマ五賢帝」の三人目として、またユルスナールの歴史小説『ハドリアヌス帝の回想』で知られ、近年では人気マンガ『テルマエ・ロマエ』に建築好きな皇帝として登場する。ローマ帝国に繁栄と安定をもたらした善帝でありながら、彼はしかし同時代の厳しい批判を浴び、その業績は長らく過小評価されてきた。その原因はひとつには、自伝などの文献が散逸し、史料が少ないこと、そして歴史家モムゼンに嫌われる原

ISBN978-4-560-08155-5

## 謎に満ちた皇帝の生涯

因となった、複雑で難しい性格にあった。彼は、合理的な判断をし自制心に富むかと思えば子どもっぽく、気さくで社交的なのに孤独の影がつきまとい、才能ある友人に恵まれ人材を抜擢した反面、身近な人々を簡単に更迭して悔いる様子がなかった。即位にまつわる疑惑。優秀な軍人でありながら、先帝が征服した東方の属州を放棄したこと。元老院との友好的な関係を築けなかった理由。そして、当時の上流階級の慣習に反して髭をたくわえ、それが新流行となったこと……。『キケロ——もうひとつのローマ史』の著者が、ハドリアヌスをめぐる数々の謎について考察しつつ、その人生を時代背景ごと活写する一冊。

◇草野伸子訳 四六判 五一四頁十口絵一六頁 定価五六七〇円(本体五四〇〇円)

# 古代ギリシア 11の都市が語る歴史

ポール・カートリッジ「著」



本書は、十一の代表的なポリス(都市国家)の盛衰史を横糸におりこんだ、先史時代からヘレニズム時代までの古代ギリシア史である。たんに都市の歴史を羅列せず、各々がギリシア史という大きな流れに、どのような役割をもって関わったかを描くことで、全体がひとつながりの通史として完結しているという、ユニークな構成になっている。取り上げられている都市は、アテナイやスパルタはもちろん、西は今まであまり通史には登場しなかったマッサリア(マルセイユ)から、東

ISBN978-4-560-08158-7

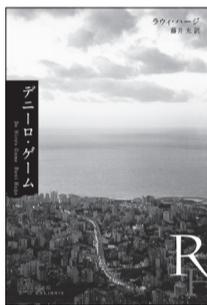
## 都市の栄枯盛衰が形づくる通史

はミレトスやアレクサンドリアまで。時代的には、紀元前二〇〇〇年代のクノッソスから、のちにビザンツ帝国の都となるビュザンティオンまで。章ごとに各都市の興亡が、神話と伝説、考古学的遺物、古典史料などを平易に紹介しながら描かれる。さらに巻末では、デルフォイとオリュンピアという全ギリシア的な神域についても、詳しい解説がなされている。本書ではまた、ギリシア文明を近代西欧文明の輝かしい祖先として称揚するのではなく、両者の決定的な「他者性」について明確に説明している点も、特色となっている。一般読者向けにわかりやすく書かれながら、同時に第一線の研究成果もふんだんに取り入れた一冊。

◇橋場弦監修 新井雅代訳 四六判 二二六頁十口絵八頁 定価二七三〇円(本体二六〇〇円)

# 「エクス・リプリス」 デニーロ・ゲーム

ラウイ・ハージ「作」



ベトナム戦争を描いた映画『ディア・ハンター』を下敷きに、レバノン内戦下を生きた二人の少年の奇々な運命。砲弾が降り注ぐベイルートの街で、アルメニア系の少年バツサムと、「デニーロ」というあだ名で呼ばれる幼なじみのジョルジュ。二人はカジノから金をくすねたり、盗んだガソリンでバイクを乗り回す無鉄砲な日々を送る。キリスト教民兵組織に引き抜かれたジョルジュはイスラエルで軍事訓練を受けるが、密造酒や麻薬の取引をバツサムに持ちかけるが、次第に二人は疎遠になっていく。

ISBN978-4-560-09017-6

## レバノン内戦に翻弄された友情

ある日バツサムは、身に覚えのない殺人事件の嫌疑をかけられて民兵組織に連行される。拷問を受けるが、運良く解放され、国外に逃れる決心をした彼は、その資金を手に入れるため、カジノの売上金を強奪する計画を立てる。成功ののち、国を脱出しようとした矢先、キリスト教勢力の最高司令官が暗殺される。バツサムはまたしても疑いをかけられ、彼を連行しにやってきたのは、他ならぬジョルジュだった……。暴力にまみれた日常の光景が、疾走感あふれる詩的な文体によって白昼夢のように浮かび上がる。国際IMPACダブリン文学賞を受賞、世界三〇カ国で翻訳された、レバノン出身の気鋭によるデビュー作！

◇藤井光訳 四六判 二九一頁 定価二五二〇円(本体二四〇〇円)

# 「エクス・リプリス」 ブエノスアイレス食堂

カルロス・バルマセーダ「作」



本書は、故郷喪失者のイタリヤ人移民の苦難の歴史と、アルゼンチン軍事政権下の悲劇が交錯し、双子の料理人が残した『南海の料理指南書』の驚嘆の運命、多彩な絶品料理、猟奇的な事件を濃密に物語る異色作。物語の冒頭、一九七九年、骸骨と

ISBN978-4-560-09018-3

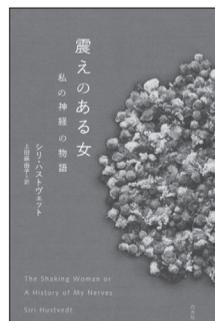
## 「アルゼンチン・ノワール」の旗手による異色作

なった母親マリナの死体と、その隣に横たわる赤ん坊セサル・ロンブローソが、マル・デル・プラタの「ブエノスアイレス食堂」で発見された。そこは、イタリヤ移民家族の歴史、二十世紀アルゼンチン史の光と闇に閉ざされた場所であり、猟奇的な事件

の幕開けでもあった。移民の双子カリオストロ兄弟は、ホテル厨房で働くマッシモ・ロンブローソの薫陶を受け、『南海の料理指南書』を執筆し、一九二二年に食堂を開店する。第一次世界大戦が勃発し、双子の親戚シアンカリーニ一家が食堂を継ぐが、やがて軍事クーデタが起き、食堂は閉鎖される。間もなく食堂は再開されるが、ペロン政権が軍事クーデタで倒れ、縁のあった食堂は暴徒に放火され、消失する。そして一九七八年、食堂を継いだものの亡くなった、ロンブローソの末裔と結婚していたマリナは、新しい命を宿していた……その赤ん坊セサルは長じて天才料理人となるが、やがて戦慄すべき正体を見せ始める……。◇柳原孝敦訳 四六判 二二八頁 定価二二〇〇円(本体二〇〇円)

# 震えのある女 私の神経の物語

シリ・ハストヴェット「著」



亡くなった父親のためのスピーチを人前でしていると突然に、激しく身体が震えはじめた……。『私』は、その不思議な体験の理由を探るために、神経内科医による診療も受ける。いつぼうで、「心と身体」にまつわる古今東西の知見を讀破して自分の精神の安寧に役立てます。

## 心と身体を整える「闘病記」

かについて、歴史を振り返ります。そして、彼女は、自分のなかにいる「震えている女」を、ポーやドストエフスキーらが描いた「分身」(＝自分の鏡)ではないかと考えます。ラカンの鏡像段階や脳に関する最新の研究「ミラー・ニューロン」、一種の思考形式として「夢」を見ること、神秘的・宗教的な体験として「声」を聴くこと等々についても、ウィトゲンシュタインや、メルロ・ポンティ、イアン・ハッキングらの著作による助けを得つつ……。ポール・オースターの伴侶でもある作家がつむぐ、「闘病の物語」。医学や心理学や脳科学はもちろん、文学や哲学などをもひもときながら自分自身の症例に向き合い、治療にのぞむ、感動的なエッセイ。

ISBN978-4-560-08146-4

# ジョージ・オーウェル書簡集

ピーター・デイヴィソン「編」



ジョージ・オーウェルは精力的な手紙の書き手だった。家族、友人たち、新聞社、ヘンリー・ミラー、アーサー・ケストラー、T・S・エリオットら文人をはじめ、本書に収録された手紙は、『全集』の編者によって入念に選ばれたものであり、私生活、政治的問題、自作への言及など、じつに多岐にわたる。作家ならではの、独自で魅惑的な体験や見解を披露し、人生を雄弁に物語る書簡集だ。

## 没後六十年記念出版

ドの成長を喜ぶ手紙が印象的だ。これまで未発表だった何通かの手紙では、恋愛について従来知られていなかった側面を見せ、小説の登場人物のモデルも明かされている。そして、政治的問題については、スペイン内戦当時のバルセロナの様子を描いた手紙に、オーウェルの政治観がうかがえる。さらに、友人と出版社に宛てた手紙では、『一九八四年』や『動物農場』といった代表作品の進捗具合、出版までの経緯を知ることができる。本書は、巨匠オーウェルの全体像を知るうえで、また第二次大戦前後の時代の空気を察知するうえで、『日記』とともに不可欠な一次資料である。また、「読み物」としても第一級の面白さを持っているといえるだろう。

◇高儀進訳 A5判 五九六頁十口絵八頁 定価八八二〇円(本体八四〇〇円)

# スマイル・レボリューション

加藤登紀子、林良樹 著



日本中を恐怖に陥れた3・11以後、私たちはどのように生き、どのような社会を創造してゆけばよいのか。千葉県鴨川の地で長年「鴨川自然王国」を担ってきた二人が、持続可能な新しい社会づくりを提案する。

農を基本とする鴨川自然王国は加藤の夫により築かれた。彼の死後その活動を支えている一人が、「真の幸福とは何か」を求めてこの地にやってきた林である。さつそく彼は、持続可能な地域社会とそこの生活をより豊かにするための活動を、地

3・11から持続可能な地域社会へ

ISBN978-4-560-08175-4

## 日本再生へ希望のネットワーク

元民とともに推し進めてゆく。地域通貨「安房マネー」や里山コミュニティの創設、都市住民と農村の交流、大山千枚田の復活等々である。3・11に際して、行政を動かしての福島被災者の受け入れ、被災地訪問と住民との交流、出張支援カフェ、支援コンサート、五〇名以上の母子週末保養受け入れ等々、これらの原動力となったのは、「共生」を目指すそうした農村ネットワークであった。危機に直面しているこの巨大消費文明を見つめ直し、自らの活動を次世代へ橋渡ししようとする両著者のことばは熱い。いまここで、一人ひとりの暮らしが変わる。日本再生へ！「そのためスマイル・レボリューション。生きることを楽しむ日々のために！」(加藤)

## 花森安治の青春

馬場マコト 著



花森安治が生まれたのは一九一一年(明治四十四)年十月二十五日、今年で生誕百年を迎える。「暮しの手帖」の創刊者であり、生涯編集長を務めた花森は、「武器を捨てよう」「国をまもるといふこと」「見よほくら一棧五厘の旗」など、反権力、反戦のメッセージを次々に発信してきた。

かつて暮しの手帖社の屋上にはためていた一棧五厘の旗は今も現社屋の入口に展示され、同社の倉庫には、花森が長年使用してきた机が保管されている。

## 封印された戦争の暗い影

戦時中、国民の戦時意識を高めるためのポスター等を製作するために使用していたものだった。そして戦後花森は、この机を生涯使い続けた。帝大新聞の編集部員時代に二・二六事件を体験した花森は、やがて軍事国家の道を突き進んでいく日本を目の当たりにする。卒業後一通の赤紙によって、満州奥地の極寒の地へと応召された花森は、結核で和歌山の療養所に入院、その後大政翼賛会に職を得た。戦後、花森は過去を封印した。それは花森が密かに誓った戦争責任のとりかただったのか。本書はこれまで触れられることの少なかった戦前時代を中心に、その思想形成を倉庫に眠る机から辿ろうとした異色の一冊である。

ISBN978-4-560-08188-9

## 鷹匠の技とマナロ

大塚紀子 著



鷹狩の歴史は古い。渡来人がもたらしたとされる鷹狩はすでに記紀万葉に登場し、貴族社会に受容された後には武家政権や戦国大名に継承されてゆく。鷹狩文化を保護した最大の功労者は家康であり、放鷹術は幕末まで厚く保護され、維新後は天皇家に受け継がれた。



将軍家および天皇家(宮内省)に仕えたのが諏訪流鷹匠である。戦後、公式の鷹狩は中止され、廃絶をおそれた第十六代鷹師・

## 鷹狩文化と諏訪流鷹術

ISBN978-4-560-08188-9

## 「人鷹一体」の極意の全て

花見薫は民間の田籠善次郎に十七代を允許し、伝来の『鷹書』を託した。一九九五年にこの十七代に弟子入りした著者は、鷹狩文化を伝承してゆくことの重要性を痛感して、〇六年早大大学院に入学、〇七年には諏訪流認定試験に合格し、晴れて鷹匠となる。本書では鷹狩の歴史、文化としての鷹狩の現況と未来をも扱っているが、匠巻は第二章「鷹の調教」、第三章「鷹と野に出る」である。鷹という高貴な猛禽を飼育し、左拳に据えて実際の狩に至るまでの、数百年間門外不出とされてきた極意の逐一が初めて一般に公開される。「人鷹一体」を追求し鷹匠のこころの体現を目指す著者の、伝統文化を後世に伝承したいとの想いは揺るぎなく、かつ感動を呼ぶ。カフ一口絵を含み図版多数掲載。

## 完全版 写真ノ話

荒木経惟 著



二〇〇五―一六年にロンドンで開催された大回顧展に向け、四十年にわたる制作秘話を一挙公開した、名著の誉れ高い『写真ノ話』刊行から早五年。この間の写真集・書籍の刊行点数は実に五十以上。「まだまだ頂点に向かってるよ」と自ら語る天才アラキーの勢いはとどまるどころを知らない。

荒木のこの五年は、驚くほど濃密な時間が流れた。七十歳の誕生日(「古希ノ写真」、がんの告知による死の気配(「東京ゼンリツセンガン」遺作「空?」東京ホーシャセン)、長年連れ添った愛猫チロの旅立ち(「センチメンタルな旅・春

## 天才アラキーのすべて

の旅(「チロ愛死」)。その一方で、人間愛溢れる肖像(「広島ノ顔」や母子像)や軽やかなグラフィック写真(AKB48や緊縛のレディ・ガガ)など、硬軟とりまぜた多彩な仕事ぶりには瞠目させられる。今回の「完全版」では、それら最新作を含め約三割内容が更新された。デビューから現在までの自作を惜しまなく解説した本書は、私写真、少女人妻、エロトス、日記、日本人ノ顔など、荒木経惟をめぐる様々なキーワードについて自らの言葉で語りながら、女性を美人に撮る方法やアングルとフレイミングの極意など、具体的なテクニックをも伝授する、まさに写真家志望者のための超(A級)教科書。プシないのに常に革新的であり続ける、アラキーの才能の秘密が随所に隠されている。写真図版三百点以上収録。

ISBN978-4-560-08182-4

## 偽りの来歴

20世紀最大の絵画詐欺事件

リー・ソールズベリ、アリー・スジヨ 著



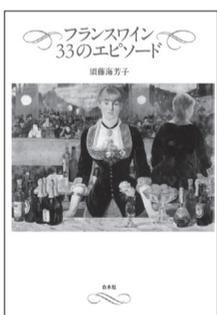
美術界を震撼させた事件のドキュメンタリー。「来歴」とは美術品が作者の手元を離れてからたどった経歴のことをいう。美術品売買では重要な要素のひとつであり、作品そのものの質よりも来歴が価値を決めることも多い。この事件が過去の贋作事件と大きく異なるのは、犯人たちが作品だけでなく、来歴までも捏造したことにある。

## 贋作はこうして「ほんもの」とされた

していたマイアットは名画の模写の仕事がきっかけでドウリュウと知り合い、贋作作家となってしまう。「来歴がきちんとしていれば、ほとんどの売買は成立する」という美術界特有の慣習を知ったドウリュウは、寄贈や寄付の約束を餌にテート・ギャラリーなど著名美術館のアーカイヴに入り、偽造した展覧会目録や売買記録をファイイルにはさみ込む。美術館アーカイヴに記録が存在すれば、マイアットが描いた贋作はお墨つき「ほんもの」となって流通してしまうのである。

## フランスワイン 33のエピソード

須藤海芳子 著



きわめて専門的なものも含め、ワインに関する蘊蓄本は多数出版されている。しかし、グラスを傾けるテーブルでの会話が、ブドウの品種や畑の土壌、味わいの分析だけに終始してしまつと、居心地の悪さを感じることもあるだろう。

フランスワインの周囲には、風土や歴史のみならず、画家、作家などにまつわる興味深い逸話が数多くある。たとえば、アルベール・カミュの「異邦人」、主人公ムルソーの名はどこからきているのか。そのカミュが、自動車事故で亡くなる直前、最期に飲

## もっと楽しい一杯のために

んだワインは何だったのか。またジェラルド・フィリップ主演の映画『肉体の悪魔』では、レイモン・ラディゲの原作にはない、印象的なシーンがある。女主人公マルトは、なぜ、注文したワインを突き返したのか。ほかにも、シャンパンの歴史を変えた二人の女性、バルザックの作品を彩るロワールのワイン、ラブレールの精神を受け継ぐ騎士団、時代に翻弄されたワインとブドウ、岡本太郎とワイン、ゴッホが描いたプロヴァンスのブドウ園、ロートレックが愛した「シャトー・マルロメ」、ロスチャイルド家のワイン、格付けワインが生んだ化粧品など、三十三のエピソードを紹介。図版多数。飲んでから読んでも、読んでから飲んで、楽しい一冊。

ISBN978-4-560-08174-7

ISBN978-4-560-08161-7

◇四六判 二〇八頁 定価一八九〇円(本体一八〇〇円) 10月下旬刊

◇中山ゆかり訳 四六判 三五〇頁 定価二七三〇円(本体二六〇〇円)



## 「独検対策 4級・3級問題集」[三訂版] [CD2枚付] 恒吉良隆 [編著]



独検合格を目指す人のためのロングセラーの最新版です。本書は文法事項を中心に、主に発音、文法、会話文、読解文、聞き取りを軸に構成されています。それぞれの場合で過去十数年の出題傾向を詳細に分析し、過去問と練習問題とで徹底的にクリアしていきます。

受験者にとって不安な聞き取り問題も、本書があればダイジョーブ！ 付属のCDには聞き取り問題が実際の形で収録されていますので、大いに心強いでしょう。しかも巻末には必須単語集 1700 も付き、独検合格を受けあいます。

◇A5判 195頁 定価 2415円 (本体 2300円)

## 「独検対策 2級新問題集」[CD付] 岡本順治、岡本時子 [編著]



2級は中級ドイツ語への第1関門。本書は2008年秋から新設されたこの2級をクリアするために、実際の試験に沿って「小問題」「読解力を問う問題」「聞き取り」の各章で過去問題を徹底的に分析し、更に「学習のポイント」で必須事項を分かりやすく解説していきます。この解説では初級の参考書ではあまり出てこない中級レベルの文法や語法もカバーされています。仕上げは例題で準備は万全。巻末に2級攻略に必須の動詞句 112 を付けました。CDには聞き取り問題だけでなく、長文問題、会話文、動詞句 112 も録音されています。

◇A5判 139頁 定価 2310円 (本体 2200円)

## 「中国語検定対策 2級問題集」[CD2枚付] 伊藤祥雄 [編著]



過去問を掲載し、狙われやすいポイントを解説した問題集。「基礎づくり完成」のレベルとされる2級は、語彙力と読解力の勝負です。類義語や慣用句の問題は、知らなければお手上げのものもあり、地道に覚えるほかありません。といっても膨大な数の語彙をカバーするのは至難の業。そこで本書では、覚えておきたい頻出語句を提示するとともに、文意を正確にとらえることで正答に近づく力を養います。

リスニング問題は、実際の試験と同じ形式でCD2枚に収録。巻末には模擬試験・慣用句リスト付。

◇2色刷 A5判 189頁 定価 2415円 (本体 2300円)

## 「スペイン語検定対策 3級問題集」[CD付] 青砥清一 [編著]



過去問を掲載した待望の問題集。3級は文法を一通り修了し、新聞などが読めるレベルです。文法の知識が問われる4級までとは異なり、3級は長めの文の読み書きが中心で、文章体や教養語も多く使われます。この本では中級文法の復習問題から始め、最新の傾向を分析し出題形式にそった練習問題で確実に実戦力アップ。語句や読解のポイントも丁寧に解説しました。付属のCDで二次面接にも対応。2回の模擬試験で本番への自信をつけましょう。巻末には難易度の高い語彙をまとめた単語集も。この一冊で西検合格！

◇A5判 177頁 定価 2310円 (本体 2200円)

## 大好評! 《日本語から考える!》シリーズ新刊

## 「日本語から考える! 英語の表現」

関山健治、山田敏弘 [著] ◇四六判 165頁 定価 1995円 (本体 1900円) ISBN978-4-560-08578-3

## 「日本語から考える! ポルトガル語の表現」

市之瀬敦、山田敏弘 [著] ◇四六判 165頁 定価 1995円 (本体 1900円) ISBN978-4-560-08577-6

日本語のプロと外国語のプロが力を合わせた画期的なシリーズ。文法だけではわからない日本語との発想の違いを楽しみながら、日本語の自然な表現を外国語にしていける過程を伝授します。

【こんな日本語をあなたの好きなあの外国語で伝えられますか】

- わあ、おいしそう。■お茶がはいりましたよ。休めましょうか。
- 「あら、どちらへお出かけですか。」「ちょっとそこまで。」

◎好評既刊◎ 日本語から考える! フランス語の表現/日本語から考える! ドイツ語の表現/日本語から考える! スペイン語の表現/日本語から考える! イタリア語の表現/日本語から考える! 中国語の表現/日本語から考える! 韓国語の表現 ◇各定価 1995円 (各本体 1900円)



## 「韓国語プラクティス 100」[CD2枚付] 増田忠幸 [著]



ISBN978-4-560-08571-4

「かたち」や「しくみ」がわかっただけでは、今度は実際に話してみたいものです。本書では、通訳の基礎的な練習方法を取り入れました。実際に使える表現が身につくよう、さまざまな文型を用いて自分のいたいことを「つたえるプラクティス 60」と、接続詞を使って理由や条件を説明し文をつなげる「プラクティス 40」の2部構成にしました。いろいろな場面に対応できるように、シンプルで無理なく使える100のプラクティスと関連表現を練習することができます。

◇A5判 150頁 定価 2310円 (本体 2200円)

## 「ヘブライ語文法ハンドブック」 池田潤 [著]



ISBN978-4-560-08572-1

ヘブライ語は、3000年以上の歴史を有する非常に古い言語ですが、一度は日常の話しことばとしての機能を失い、約100年前に復活した「古くて新しい」言語です。多くの言語が絶滅の危機に瀕している現在、ヘブライ語の「復活」劇は一筋の希望として言語学者の注目を集めています。本書は、イスラエルの公用語である現代ヘブライ語の待望久しい文法書です。文字と発音から語順や構成要素にいたるまで、そのしくみを日本語や英語との比較から詳しく解説していきます。時代による変遷やさまざまなヴァリエーションにも言及。巻末変化表、文法索引付。◇A5判 280頁 定価 4410円 (本体 4200円)

## 「ニューエクスプレス グルジア語」[CD付] 児島康宏 [著]



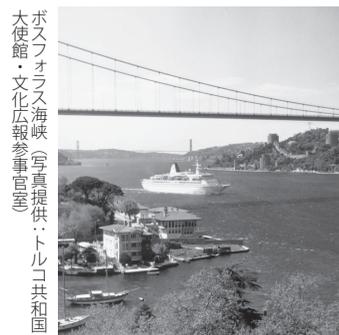
ISBN978-4-560-08573-8

カフカス山脈のふもと、黒海を臨むグルジア。あまたの民族が行き交う地で歴史ある文化を誇り、最近ではワインや映画などを通して、またグルジア出身の力士の活躍から、少しずつ身近な国になりつつあります。グルジア語は、見慣れない文字、動詞の複雑な変化など、最初はちょっと大変そうに見えますが、ただいたずらに難しいわけではありません。一步一步勉強を進めるうち、だんだんグルジア語独特のしくみが感じられることでしょう。日本初の音声つき教材で、グルジア語の豊かな世界へ踏み出してみませんか。

◇A5判 146頁 定価 3150円 (本体 3000円)

リレーエッセイ  
ことば紀行第8回  
「トルコ語」  
野田納嘉子

- 【主な使用地域】トルコ共和国、キプロスの一部
- 【話者数】およそ 7500 万人
- 【使用文字】ラテン文字にトルコ語固有の文字が加わり合計 29 字
- 【あいさつしてみよう】Merhaba! こんにちは! (メルハバ)



ボスフォラス海峡 (写真提供: トルコ共和国大使館・文化広報参事官室)

## 「不倫ドラマ」でトルコ語学習

昨年の第60回ベルリン国際映画祭で『蜂蜜』(原題 Bal) が金熊賞を受賞するなど、近年トルコ映画が注目の的であるが、トルコのドラマも負けてはいない。日本ではほとんど知られていないが、現地新聞報道によると、トルコでは昨年70を超える連続ドラマが近隣約20か国に輸出され、5000万ドルを稼いだという。日本にはまだ入ってきていないが、ありがたいことにそのほとんどはネットで無料視聴することができる。現在トルコで大ヒット放送中の『華麗なる世紀』(原題 Muhteşem yüzyıl、スレイマン大帝を描いた大河ドラマ)をはじめ、コメディ、ホームドラマ、悲恋もの、刑事もの等、様々なジャンルがある。片っ端から視聴したいのだが、トルコのドラマは1話あたり約90分あり、最低でも40話、長いものは100話を越すので、何でもというわけにはいかない。1つの作品をじっくり味わいたい私が縁あって視聴しているのが、『禁じられた恋』(原題 Aşk-ı Memnu)。題名から想像される通り不倫を扱ったドラマだ。オスマン帝国末期の1899年に発表された同名の小説を現代に置きかえて制作され、2008～2010年に放

送されたこのドラマは、トルコ国内での放送全般に目を光らせるラジオ・テレビ高等機構 (RTÜK) より、主役2人の不倫シーン(日本のドラマと比べると大したことはない)やドラマで描かれている内容が社会に悪影響を与えている、とたびたび警告されたにも関わらず大ヒット、最終回はテレビをつけている家庭の2つに1つが視聴していたという。イタリアではリメイク版を製作・放送予定だそう。

イスタンブールのボスフォラス海峡沿いに建つ大邸宅に住む上流一家と彼らの生活を支える召使い一家が繰り広げる日々の生活や恋愛模様を描いたこのドラマ、ただ観るだけでもおもしろいのだが、トルコ語の学習教材に打って付けなのだ。何せ不倫の物語なのでストーリーがわかりやすい。登場人物同士の会話を聞き取ることによってヒアリング力が養われるし、セリフにふんだんに盛り込まれていることわざや慣用表現は語彙力を豊かにしてくれる。1回で聞き取れなければ何度でも繰返して聞けるのもいい。トルコ語学習者といえばそのほとんどは入門レベルに留まっていたが、近年徐々に増えてきた上級レベル学習者向けの授業で、是非このドラマを使ってみようと思っている。(トルコ語通訳・翻訳・語学講師)

# 山姥の辞書

やまんばん

小池昌代

## ③「燃える」

仕事を終えて横になった。夢の世界に入りかけたとき、大音響が鳴り響いた。午前三時。あたりはまだ、真つ暗である。

アパートのどこかで、警報音が鳴り響いている。それはまったく鳴り止む気配がない。え？ まさか、うち？ 最近、何か問題があると、まずは我が身を疑うようになってしまった。なんでも人のせいにして、それで済んだ若いころが懐かしい。がばりと跳ね起き、警報装置を確認。とりあえず、うちじゃないみたい。

わがアパートは、中庭を挟んで口の字型に建っている。ベランダに出て、状況を見ると、わたしと同様、警報に驚いた人々が、通路へ、ベランダへ、わざわざと出てきた。

そのうち、三階の部屋から、もくもくと煙が。火事だ！ 火事！ サイレンが聞こえて消防車が到着し、たくさん消防隊員がやってくる。煙のあがった部屋のなかから、ようやく女性が現れた。すみませーん。タバコの不始末で……申し訳ありません。

口の字の片隅で普通に声を出すと、拡声器でもあるように声がよくわかる。それは普段から知ってはいた。夫婦喧嘩、親子喧嘩、子供や赤ん坊の泣き声などが、ここではとてもよく聞こえる。というか、あらゆる声がある。よく響く構造になっている。それに、よく響く構造になっている。それに、よく響く構造になっている。

◇こいけ・まさよ 一九五九年東京生まれ。著書に、詩集『ゴルカタ』『パバ、バサラ、サラバ』、小説『タタ』『弦と響』『エッセイ』『屋上への誘惑』など。近著に『文字の導火線』『黒蜜』。

が身を改めた（もう遅い）。ここはそういうアパートなのである。

火事ははやですみ、火の手はあがらなかつた。それでもアパートの住人たちは不安にかられ、戸のなかから次々と出てきた。パジャマの人もいれば着替えている人もいる。知ってる人も知らない人も。うちの子供を孫のように可愛がってくれる、おじいちゃん、おばあちゃんも廊下へ出てきた。ぼやを出した部屋の若い女性を、わたしは初めて見たのである。そうやって、普段はまったく閉ざされた扉から、たくさん顔が現れて、明け方の通路は人でもよめた。

大音響があがったにしては、あつけないほど、簡単にコトは収まり、それでも消防隊員は事後処理のために、しばらくそこにいたものだから、一度出てきた人たちも引つ込むタイミングを失った。消防隊員が珍しくて、わたしもまだ外にいた。

あたりはだんだんと明るくなってきた。こんなにたくさん人が住んでいたのね。物寂しい明け方の時間。一人きりの夢のなかへ、まだ戻っていく勇氣がないというように、みんなぐずぐずと野次馬になった。それから一人が欠け、二人が欠けた。

寝て起きて、カーテンの影から、わたしは中庭を盗み見る。明け方のアパートなど、もう、どこにも見当たらない。人はおらず、声も立たず、同じ扉が並んでるだけ。ぼやのあったあの部屋も、何事もなかったかのように静まり返っている。わかつてはいたが寂しかった。

## 鎌田浩毅

# 「知的生産」のための術語集

第3回  
「情報」

インターネットの普及は知的生産の現場を大きく変えた。大量の情報が発信され、瞬時に行き交う「デジタル情報革命」は今も進行中だが、一方で、多くの人が情報過多に陥っている。

たとえば、私の研究室には毎日数十通の電子メールが届く。専門に関する最新動向を知るには、ウェブ上の国際学術雑誌や論文集に目を通さなければならぬ。研究を離れても、読んでおきたいホームページ・ブログ・ツイッター、チェックしたいテレビのドキュメンタリー番組など、私も既に情報過多の状態だ。

もちろん、質の良いアウトプットを心掛けようと思えば、良質の情報を大量にインプットすることが肝要である。しかし私は、そもそも情報が多すぎると、人が本来もっている創造力を退化させてしまうのではないかと危惧する。研究のみならず、日常生活にとっても深刻な問題となりかねない。

情報過多は、食べ物の摂り過ぎに

よって生じる栄養過多と置き換えれば分かりやすい。近年、日本中がグルメブームで、おいしいものをたらふく食べることが幸福の要件とされている。しかし、美味であればあるほど、人は誘惑に勝てず、必要以上に食べ過ぎてしまう。その結果、胃腸を壊したり、永年の栄養過剰がたつて成人病になったりする。

これと似たことが情報についても言えるのではないかと。満腹ではないに豪華な料理を出されても食欲がわかなくなると、情報を詰め込みすぎた頭脳には、肝心の知的好奇心が衰えてしまう。これでは新しい発想のもとに思考することは難しい。

## 情報の海に溺れないために

うに、情報過多に陥った頭は柔軟性がそこなわれている。私のように研究を生業としていた場合は、新しい発想が生まれるかどうか、またクリエイティブな仕事ができるかどうか、勝負の分かれ目となる。その際には、情報過多にならないように絶えず頭をコントロールすることが、何よりも大切なのだ。

かつて、宴会の酒席に出かける前に胃腸薬を飲むCMがテレビで流れていた。まるで薬の力で飲食物量をさらに増やそうとするかのようである。これでは本当においしい食物を味わう感性が摩滅してゆくに違いない。

本の世界もそうである。書店には

既に氾濫している情報に立ち向かうように、新刊書が流れ込んでくる。過剰な新刊がさらに大量の新刊を呼び込む悪循環が止まらない。こんなことを続けていけば、書籍が本来もつべき価値は、いつまでもたつても伝わらないではないか。

大事なことは、本当に必要な情報のみを厳選して頭に入れるかどうかである。一番おいしく料理を食べる秘訣は、お腹を空かせることだ。同様に、知的な空腹感があつて初めて、若者が水を吸うように知識が頭の中に吸収される。何でもかんでも新しい情報に飛びつくのではなく、あえて遠ざける勇氣を持つことが大切なのだ。と、私自身、実はこれが決して簡単でないことを毎日感じているのであるが、私がこういうことを考えるようになったのは、古典の一節に巡り会ったからである。「論語」学而篇の四章に「吾れ日に三たび吾が身を省みる」という有名な句がある。私は一日に何度もわが身を振り返って反省します、というほどの意味である。

この「省」という漢字の意味について、陽明学者の安岡正篤が興味深い指摘をしている。「知命と立命」プレジデント社。「省」には元来「はやく」と「かえりみる」の両方の意味がある。情報過多の日常からどうでもよいことを省き、毎晩少しづつ古典を読み自らの人生を省みる、と解釈できる。

世の中には知恵のぎつり詰まった古典が数多くある。しかし、忙しさにまけて、その存在すら知らずに日々を送ることが多いのだが、こうした状態を反省するのである。これができるとは、まさに各人の意識の持ち方による。

# 中国を読む

時事通信中国総局特派員  
城山英巳

## ■若い記者は共産党の壁を打ち破れるか

時事通信特派員として8月12日、北京に駐在を始めた。2度目の北京長期駐在になるが、筆者の関心は、中国社会がいかに変容するか観察することにある。その中でも、社会の変化を促す新興メディアが、メディアを統制する共産党中央宣伝部といかに戦っているか、そして若い記者たちは果たしてこの巨大機関の壁を突破できるのか、ということだ。

共産党・政府が支配する官製メディアとは違い、調査報道と独自の視点で大衆の人気を集める新聞・雑誌の記者たちと食事を共にする機会があった。話題は、9月初め、北京の人気大衆紙「新京報」と「京華時報」が、北京市共産党委員会宣伝部の直接管理下に入ったことに集中した。共産党のメディア統制に対する彼ら彼女ら、若い記者の懸念は強い。

しかしその背後には、社会の暗部を暴こうとして「イケイケ」となる調査報道記者の盛り上がり、その記事を読んだ大衆が反体制感情を高めることに対する共産党の危機感がある。一党独裁体制を揺り動かしかねないと感じているのだ。

「7・23（浙江省での高速鉄道脱線事故）で（当局はメディアを）抑え切れなくなった」。ある新聞編集幹部はこう漏らした。高速鉄道事故では、ツイッターと機能が似た「微博」と呼ばれるミニブログが大活躍。事故に遭遇した人たちのつぶやきが、国営新華社通信の速報を圧倒し、「微博」には鉄道省への批判が集まった。記者たちはこうした世論の後押しを受け、「鉄道省解体論」まで掲げた。その結果として、批判の急先鋒だった「新京報」などへの引き締めである。

ある記者は共産党管轄の新聞から、人気新聞「南方週末」に移った。「私のいた新聞で報じられないことを『新京報』が報じている」と不満を感じたからだ。「報じられない」ことに対する記者たちの欲求不満が、社会を変える原動力になっている。

しかし先行きは険しい。ある中国人弁護士は「北京のA紙は以前、すごくおもしろかった。しかし今はどうか。『新京報』と（党系列の管轄となった）A紙を比べたら一目瞭然。A紙はすぐ読み終わってしまう」と語った。北京の良心とも評され、混沌とした中国社会を監視し続けた「新京報」も読み応えのない新聞に成り下がるのか。

◇しろやま・ひでみ 『中国共産党「天皇工作」秘録』（文春新書）で第22回アジア・太平洋賞特別賞受賞。他の著書に、『中国臓器市場』（新潮社）、『中国人一億人脳調査』（文春新書）。

高度情報化社会は人間を際限なく忙しくさせる。情報過多が柔軟性と判断力を削ぐことのないように、心して対処しなければならぬ。情報の海に溺れず、すむ簡単な道は、日に三省することだ。「論語」は教えている。古典を読むメリットの一つは、いつか雑事を離れて自分を取り戻す時間をもつことだ。デジタル情報革命を乗りきるには、実は、千五百年前の知恵が役に立つ。

◇かまた・ひろき 京都大学教授。理学博士。専門は火山学・地球科学・科学コミュニケーション。著書に『火山と地震の国に暮らす』（岩波書店）、『マグマという名の煩惱』（春秋社）、『座右の古典』『知的生産な生き方』（東洋経済新報社）、『世界がわかる理系の名著』（文春新書）など多数。

NEWS & TOPICS

★紙名リニューアルのお知らせ

本紙は次号から「パブリッシャーズ・レビュー ◎白水社の本棚◎」として生まれ変わります！

本紙「出版ダイジェスト ◎白水社の本棚◎」は、次号 2012 年冬号 (2012 年 1 月 15 日ごろ発行) より、「パブリッシャーズ・レビュー ◎白水社の本棚◎」に紙名をリニューアルいたします。出版社からの情報発信の場としての役割をより意

識した紙名にいたしました。従来の新刊案内・大好評の読み物連載はそのままだけに、ますます充実した内容をお届けしてまいりますので、これからもご愛読お願い申し上げます。



★「《エクス・リブリス》フェア」「《文庫クセジュ》フェア」のお知らせ

今秋、全国書店で「《エクス・リブリス》フェア」および「《文庫クセジュ》ワンテマ・フェア」を順次開催中です。ラインナップ・開催店舗など詳細は白水社ホームページにてお知らせします。ぜひお立ち寄りください。

エクス・リブリス フェア - 2011 秋 -

おかげさまで「世界の文学」の新シリーズ《エクス・リブリス》は来年 3 周年を迎えます。慌ただしい夏が過ぎ去った後、静けさと涼しさを感じながらじっくり読んでもらいたいラインナップをそろえました。

ラインナップより (価格税込)

ヴァレンタインズ

オラフ・オラフソン作 岩本正恵訳 夫婦や恋人たちの愛と絆にひびが入る瞬間をとらえた 12 篇。現代アイスランド文学の旗手による珠玉の短篇集。◎ 2520 円



そんな日の雨傘に

ヴィルヘルム・ゲナツィーノ作 鈴木仁子訳 46 歳、無職、つい最近彼女に捨てられた。どこにも居場所がない……。滑稽で哀切に満ちた人生を描く。◎ 2100 円



青い野を歩く

クレア・キーガン作 岩本正恵訳 名もなき人びとの恋愛、不倫、小さな決断を描いた、アイルランドの新世代による傑作短篇集。◎ 2310 円



◎《文庫クセジュ》ワンテマ・フェア◎ 教養としてのオカルト

ヨーロッパの歴史も、思想も、芸術も、オカルト抜きには理解できません。トンデモ本ではなく、きちんとした知識を《文庫クセジュ》で養いましょう。



ラインナップより (価格税込)

- 秘密結社 改訂新版(セルジュ・ユタン著、小関藤一郎訳、1103 円)
●神秘主義 改訳(アンリ・セルヤー著、深谷哲訳、1103 円)
●ギリシアの神託 (ロベール・フラスリエール著、戸張智雄訳、999 円)
●錬金術 (セルジュ・ユタン著、有田忠郎訳、1103 円)
●占星術 (ポール・クーデール著、有田忠郎他訳、999 円)
●異端審問 (ギー・テスタス他著、安斎和雄訳、1103 円)
●伝説の国 (ルネ・テヴナン著、笹本孝訳、999 円)
●秘儀伝授 エゾテリズムの世界(リュック・ブノワ著、有田忠郎訳、999 円)
●ヨーガ (ポール・マッソン＝ウルセル著、渡辺重朗訳、1103 円)
●異端カタリ派 (フェルナン・ニール著、渡邊昌美訳、1103 円)
●薔薇十字団 (ロラン・エディゴフェル著、田中義廣訳、999 円)
●死後の世界 (フランソワ・グレゴワール著、渡辺照宏訳、1103 円)
●フリーメーソン (ポール・ノードン著、安斎和雄訳、1103 円)
●透視術 予言と占いの歴史(ジョゼフ・テスアール他著、阿部静子他訳、999 円)
●悪魔の文化史 (ジョルジュ・ミノワ著、平野隆文訳、1103 円)



【近刊予告】11月刊行予定の新刊 (2011 年 10 月 1 日現在)

表示価格は 5% 税込です。書名・刊行時期等は変更する場合があります。ご了承ください。最新情報および書籍の詳細は、白水社ホームページをご覧ください。

- ・スターリンの子供たち 離別と粛清を乗り越えて (オーウェン・マシューズ著、山崎博康訳、2940 円)
・北の古文書 [世界の迷路 II] (マルグリット・ユルスナール著、小倉孝誠訳、3570 円)
・Eメールの韓国語 (白宣基他著、1995 円)
・バイオバンク 先端医療を支えるインフラの現状と課題 [文庫クセジュ 963] (フロランス・ペリヴィエ他著、桃木暁子訳、1103 円)
・パラードのローマ 古代遺跡・教会案内 (ヴォーン・ハート他編、桑木野幸司訳、5040 円)
・執事とメイドの裏表 イギリス文化における使用人のイメージ (新井潤美著、2100 円)
・ビルマの独裁者 タンシュエ (ベネディクト・ロジャーズ著、秋元由紀訳、根本敬解説、2940 円)
・フクロウ その歴史・文化・生態 (デズモンド・モリス著、伊達淳訳、2730 円)
・ニューエクスプレス ラテン語 [CD 付] (岩崎務著、2730 円)
・わたしはここよ (河野裕子著、1890 円)

編集メモ

福島県楢葉町の J ヴァイレッジで勤務中に被災した『サムライブルーの料理人』の著者、西芳照氏への励まし声、J ヴァイレッジ復活を望む声が多く寄せられている。西氏の近況を報告したい。東京に避難してきていた西氏の故郷への思いは強く、八月に福島に戻り、J ヴァイレッジ内のレストラン「ハーフトタイム」再開の準備を始めた。物が散乱した店内の片付けなどを終え、九月にオープン。福島第一原発の作業にあたる方々に食事を提供している。同

営業部

海外文学を紹介する「エクス・リブリス」が来春 3 周年をむかえます。文芸書離れ、とりわけ海外文学離れのいわれる昨今、読者の反応はどうか? 不安を抱えての刊行開始でしたが、皆様の応援に支えられて、これまで続けてこられました。今後も良質な海外文学を紹介してまいります。

営業部

弊社の本を目立つ場所に置いていただけるかどうか、営業力の問われる日々でもあります。9 月上旬より順次、全国の書店で「2011 秋のエクス・リブリス」フェアを開催中です。ささやかなリーフレットも用意いたしました。店頭で見かけたら、ぜひお立ち寄りください。

毎日書店を訪問して、多くの本を見ていますが、このところ他の出版社からも海外文学が増えきたように感じます。仲間が多くなるのは心強いことですが、

【お願い】▼住所表記が変更になりましたら、お名前、新住所・旧住所、お届けいたしております本紙のお客さまコードをお知らせください。

本の十字路

二〇〇三年二月、スペースシャトル・コロンビアが大気圏再突入後に空中分解し、乗組員七名全員が死亡する事故が起きた。これでスペースシャトル計画は中断。国際宇宙ステーション (ISS) の無人化を避けるため、ロシア主導でできりぎりの人員交代劇が繰り広げられた。その様子や克明に描いたのがクリス・ジョーンズ『絶対帰還』(光文社)だ。ISS に

残された三名のクルーは、スペースシャトルで滑空して地球に戻ってくる代わりに、急遽、狭いソユーズで落下することになった。このギャップは想像以上に大きいらしく、乗組員の間にはさまざまな悲喜劇を生む。今年八月のロシア無人宇宙貨物船プログレスの打ち上げ失敗の影響で ISS の無人化が再び懸念されているというが、今度は果たしてどうなるか。(クロポ)

話題の本

◎表示価格は 5% 税込です。

白水社

サッカー日本代表の活躍を支える料理の秘密

サムライブルーの料理人

サッカー日本代表専属シェフの戦い

西芳照著



ジーコ、オシム、岡田、ザッケローニ監督のもと、世界で戦う選手たちを「食」で支えてきた専属シェフが初めて語る、W 杯の秘策と感動の舞台裏。W 杯の勝利のメニューとレシピ掲載! ●1680 円

装幀家の先駆者が照射する文学と人間の深淵

本の魔法

司修著



古井由吉「香子妻隠」、島尾敏雄「死の棘」、中上健次「岬」など、戦後を代表する文学作品の創作の過程で、作家に寄り添い、深い読みを装幀に表現してきた芸術家が語る濃密な背景。●2100 円

はじめての本格的評伝!

新藤兼人伝 未完の日本映画史

小野民樹著



日本映画界を代表する、最高齢の映画監督! その孤高の歩みを昭和史とともにたどる。シナリオも巧みに引用しながら史実を積み重ねた、決定版の評伝。全作品年譜・人名索引付。●2940 円

短歌と科学の半生記

もうすぐ夏至だ

永田和宏著



細胞生物学の権威であると同時に歌壇の第一人者が、亡妻河野裕子とともに築いた創造の日々を、見事な筆致でつづる待望のエッセイ集。●1995 円

戦史ノンフィクション決定版!

ノルマンディー上陸作戦

1944 (上・下)

アントニー・ビーヴァー著 平賀秀明訳

国家元首や将軍から、一兵卒や市民まで、最新史料を縦横に駆使して、「大西洋の壁」を突破し、「パリ解放」に至るまで、連合軍と独軍の攻防を描写した戦史決定版! 写真・地図多数収録。各●3150 円